

自動光電子午環 (PMC) 棟のミステリー



中 桐 正 夫

〈国立天文台天文情報センター 〒181-8588 東京都三鷹市大沢 2-21-1〉

e-mail: nakagiri.masao@nao.ac.jp

国立天文台に1982年建設された自動光電子午環の望遠鏡フロア階下のミステリーである。その空間には、けものが侵入し生活した形跡があり、その正体はハクビシンであった。また望遠鏡ピア周囲の砂の水抜き用の深い井戸の底に謎の物体があった。何と「ロダンの接吻」像のレプリカであった。これらを天文台歴史観測隊が探検した物語である。

1. はじめに

子午儀、子午環は天文学の黎明期にイギリス、ドイツ、フランスから輸入されている。今回は黎明期から近代まで活躍し、役割を終えた最後の子午環にまつわる話である。三鷹市にある国立天文台は長い歴史をもっている。その前身である東京天文台は1878年に東京大学に観象台として発足している。1883年に観象台が天象台と気象台に分かれ、その天象台が、海軍観象台、内務省地理局と統合されて1888年に東京天文台となり、海軍観象台があった麻布区飯倉の地に発足した。明治41-42年頃、東京の空が明るくなり観測がしづらくなかったこと、土地が狭隘なため発展できないため三鷹村に移転することとなり、まず72,000坪の土地が購入された。その後、国有地の編入、民間からの寄贈などがあり最終的には10万坪に及ぶ現在の国立天文台がある三鷹市大沢に移転した。しかし、土地購入後すぐには移転されなかった。土地は購入されたが移転のための費用がなかなかつかないこと、天文台職員が田舎に移転することを渋ったため移転は遅々として進まなかった。それでも大正4年には1号官舎が建ち、現在の20cm赤道儀望遠鏡のドームは大正10年には建設された。しかし、本格的な移転は大正12年の

関東大震災で麻布の天文台が壊滅するまで待たなければならなかった。

2. フランス製 200 mm ゴーチェ子午環

三鷹の構内には1903年にフランスで製作されたゴーチェ子午環(写真2,3)がある。関東大震災は1923年である。1903年製のゴーチェ子午環がなぜ現在も三鷹の地にあるのであろうか。ゴーチェ子午環は1904年には日本に着いていたが、麻布には1880年に購入された143mmメルツ・レプソルド子午環(写真1)があり、この新しい

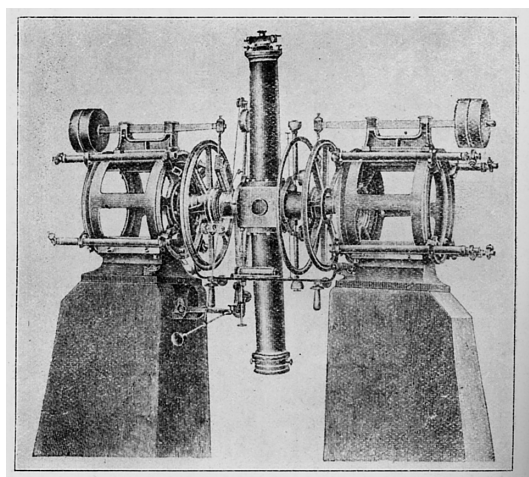


写真1 143mmメルツ・レプソルド子午環。

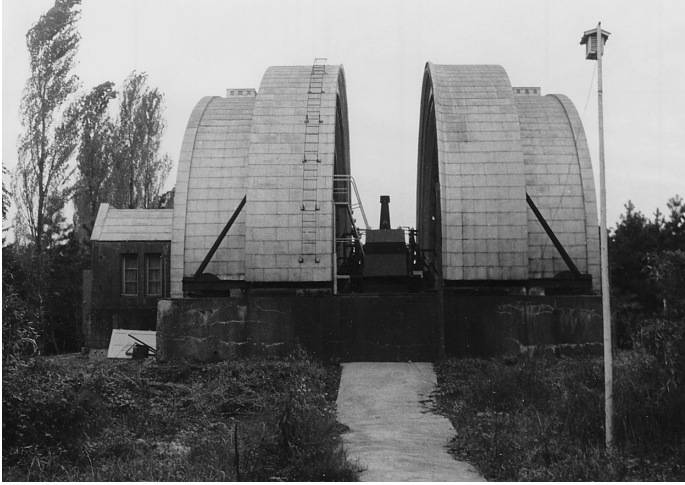


写真2 ゴーチェ子午環ドーム.

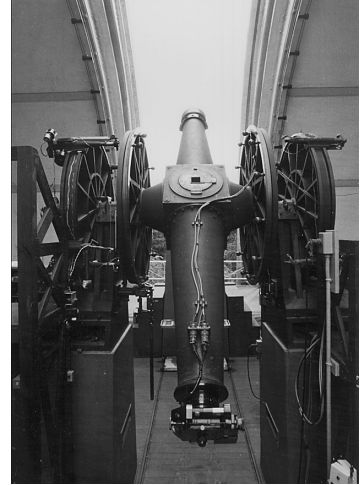


写真3 ゴーチェ子午環.



写真4 PMC 観測棟.

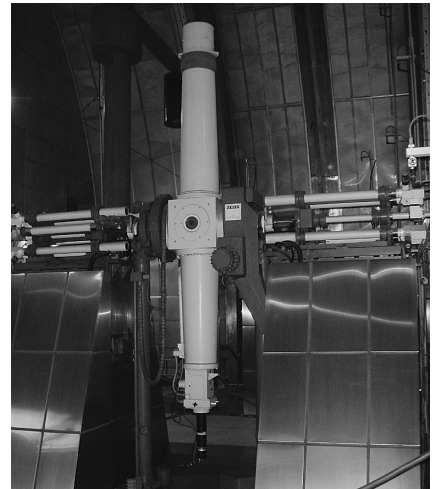


写真5 PMC 本体.

ゴーチェ子午環を展開する広い土地がなく20年を経ても梱包が解かれていなかったため、関東大震災の難を免れたのである。メルツ・レプソルド子午環は大破し、現在ではその残骸さえも残っていない。ゴーチェ子午環は三鷹に建設された瀟洒な「かまぼこ型」の観測棟で組み上げられ恒星、太陽、惑星、月などの位置観測が行われ、基本星表のデータを生み続けた。しかし、この望遠鏡は複数の観測員で行われる眼視観測であったため、個人差による精度の限界があり、1982年に後継機のドイツ・ツァイス製の190mm自動光電子子午環完成

で1年の同時観測を経て観測を終了していた。その後、眼視接眼部をCCDカメラに換えてクエーサーの位置観測に用いられたが1990年代に入ると完全に観測は行われず眠りについていた。

3. ドイツ製 190 mm ツァイス自動光電子子午環

ゴーチェ子午環の後継機である自動光電子子午環は1982年に完成した(写真4,5)。しかし、この最新鋭の自動光電子子午環は10億円の巨費を投じて建設されたが15年ほどの観測でその使命を終え

てしまった。それは1989年にヨーロッパ宇宙機関が星の位置観測を行う人工衛星「ヒッパルコス」を打ち上げ、太陽近傍の12万個の及ぶ恒星の位置観測を地上観測の10倍もの精度で観測してしまっただからである。それより精度は落ちるが250万個の星の位置も観測してしまい、地上からの観測する意義を失ってしまったためである。

4. さて、本題のPMCのミステリー その1: 望遠鏡フロア階下の 「けもの」

1982年に建設され、15年間ほどの観測を経てその役目を終えた自動光電子午環（以後PMCと記す）は2007年度から国立天文台の常時公開コース拡大に伴い、その管理が天文情報センターに移管された。天文情報センターではガラス張りの見学室を設け、ガラス越しにPMCを見学に供するとともに、その管理のためにPMC望遠鏡フロアの階下に入ることもあった。その階下の広い空間には、その望遠鏡、コリメーターのピアの基礎があり、それらは周囲の壁とともに分厚い発砲ウレタンの断熱材で蔽われている。この空間にはPMC棟玄関前の入口以外には出入り口はない。ところがその空間に獣が木の実を食べ、排便した痕跡があるのである。そして観測していた当時、関係者によってその獣の屍骸が発見され写真さえ撮られていた（写真6）。そして望遠鏡のフロアのピアにその獣が駆け上がった足跡（写真7）が残っている。PMCは自動観測であるから観測中は、望遠鏡エリアは無入である。考えられることは、この観測棟の南側に植えられた植え込みの木々に上った獣が開いているスリットから中に入り、望遠鏡のケーブルスペースを伝って階下に入り込んだと考えるほかない。天文台歴史観測隊は、このけもの屍骸の写真の存在を知らず、ピアに残された足跡を好奇心をもって眺め、てっきり狸だと思っていたが正体はハクビシンであった。



写真6 PMC階下のハクビシンの屍骸。



写真7 望遠鏡ピアの足跡。

5. PMCのミステリー その2: 深い井戸の底のなぞの「包み」

PMC階下にはピアを包む砂の層の水抜き用の深い井戸（写真8）がその空間の東西に2本設置されている。その西側の井戸の底にビニール状のもので包まれたもの（写真9）があることに気がついた。井戸の底にあるものを引き上げる道具は小さなイカリのようなものがあることを知っていた筆者は、天文台構内のロンビクアンテナの残骸を使って金具（写真10）を製作した。

この西側の深い穴の底になにやら存在することに気がついたのは、PMCの建物の管理を引き継いで、望遠鏡フロアの階下の空間の除湿機の水を捨てる役目を引き継いで間もなく（2008年4月）



写真8 深い水抜き用井戸.

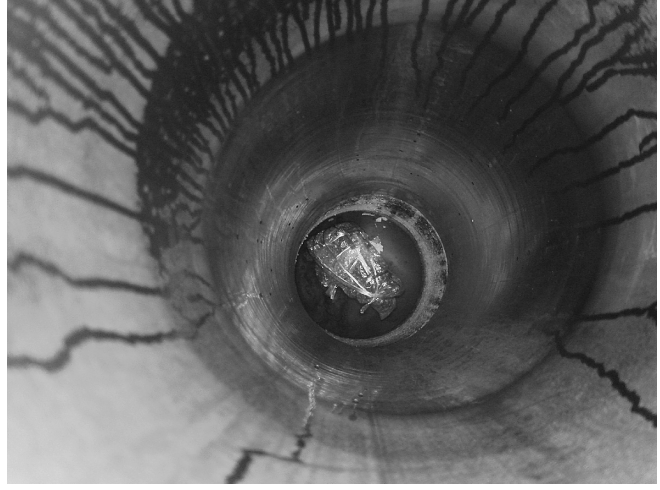


写真9 深い井戸の底にあるなぞの物体.

のことであった。気になっていたが直径 30 cm ほどの塩化ビニールの筒を垂直に埋め込んだ深さ 5 m ほどの井戸の底に横たわる物体を引き上げるのは容易なことではない。そこで「つるべ拾い用イカリ」の製作まで待たねばならなかった。

こんな面白いことは、こっそり一人でやりたかったが、この井戸の底の物体は多少不気味でもあった。このことに仲間の天文台歴史観測隊の者たちが黙っているわけもない。「つるべ拾い用イカリ」ができて、1週間後の1月20日、ついに引き揚げ作業を行うことになった。天文台歴史観測隊の面々、高田、中根、山下、中桐は「イカリ」、懐中電灯をもち、PMCに向かった。出かける道々、多分この金具では無理だろう、ゲームセンターにある景品を吊上げるクレーンの挟み込むような金具が必要だろう、今回は失敗しても仕方がないなどと話しながら現場に乗り込んだ。

現場の地下に入る前に、望遠鏡フロアに置いてある7-8 mのロープを調達し、金具を縛り(写真11)、さあ準備完了。中根さんが懐中電灯で照らす井戸の底に向かって、「つるべ拾い用イカリ」を降ろしていく。案の定、直径 30 cm ほどのところにある包みを「イカリ」で引っかけるのは容易ではなかった。何度も繰り返し試みているうちにうま

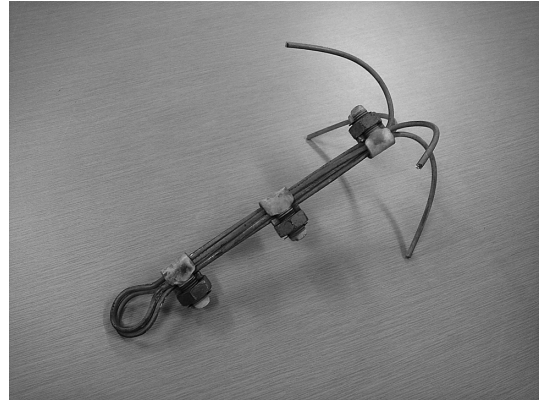


写真10 自作したつるべ拾い用イカリ.

く引っかかってくれた。引き上げる途中(写真12)で写真撮影のため手を止めることもあったが、落としてはならないので、途中の写真撮影は1回にして、一気に引き上げた。

深い井戸の中から引き上げられたものは、俗にプチプチと呼ばれる気泡の入ったビニールの梱包用緩衝材で包まれ、ビニール紐で厳重に縛られたものであった(写真13)。

金具に引っかけ引き上げる感覚ではさほど重いものではなかった。金塊か、という期待がないではなかったが、1982年完成のこの建物にそれほどのものがあるはずもない。引き上げられた包みを見て、まず思ったのは「観音さま」の像ではない



写真11 ロープにつけたイカリ.

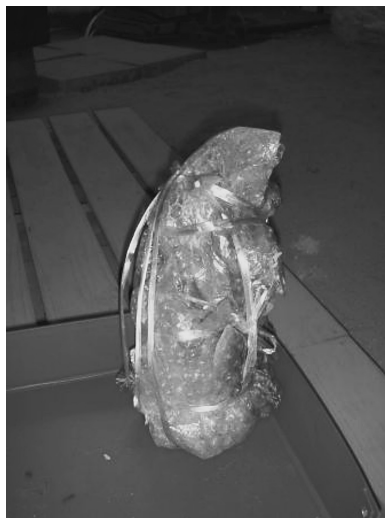


写真13 引き上げられたなぞの物体.

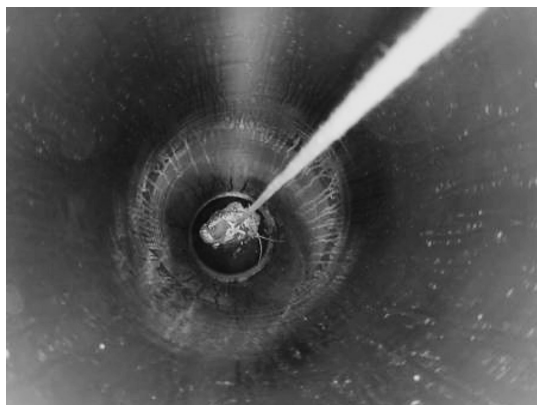


写真12 引き上げられるなぞの物体.



写真14 包みを開いたところ.

かと思ったが、もっと悪い予感もしていた。それは、最悪は工事の際負傷した体の一部が包まれ「ミイラ」状になったものではないか、あるいは動物の屍骸ではないかという想像もあった。何しろこの地下室には狸（ハクビシン）が生息していた痕跡があったのである。恐る恐る包みを気味悪い気持ちを隠しながら嚴重なビニールひもを解いて出てきたものは、なんと真っ黒い彫刻であった（写真14）。深い井戸の底に横たわって25年以上経ているだろう。当初は水の中にあり、井戸が枯れてからは砂の上に横たわっていたため、細かい砂が着いていたが、裸の男女が抱き合って接吻を

している彫刻であった。歴史観測隊の面々が驚嘆の声を上げたのは言うまでもない。

何とも謎めくではないか。引き上げたこの彫刻を書類箱に入れ、部屋に持ち帰り、筆を使って丁寧に砂を払ったものが写真15である。この何ともミステリアスな像の発見はどう考えたらいいのだろう。観測隊員一同は首をひねるばかりであった。

PMCの地下室から出たところで、観測フロアに展示しているマン製の座標測定器に注油のため



写真15 砂を払った艶めかしい像.

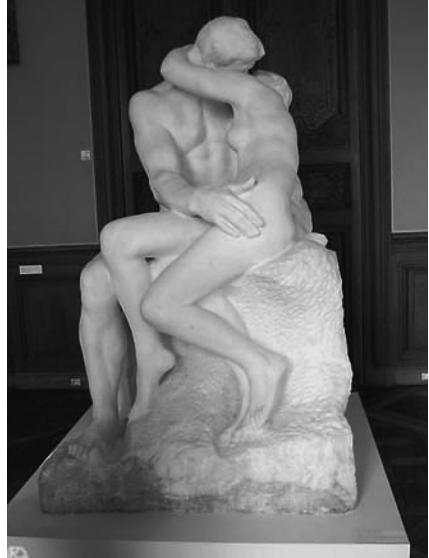


写真16 ロダンの接吻像.

に訪れていた畑中氏に出会った。彼はこの像を見て即座に「ロダンの接吻」像だといった。観測隊の面々は、この像の出現に驚嘆するばかりで、そういったことに思いをめぐらせる余裕もなかったのである。

部屋でさっそく、「ロダンの接吻」像（写真16）について調べると、確かにそっくりではあるが、細部についてよく見ると男性の首の角度が、女性の足の位置、女性の首の角度などいくつかの点で違いはあるが、原型はたぶん「ロダンの接吻」であろう。

まずは、PMC建設の責任者であった東京天文台名誉教授最長老の安田春雄先生に何かこの件についてご存知ではないでしょうかと、お尋ねする手紙を書いた。さっそくお電話で返事をいただいた。天文台側のこのプロジェクト関係者がそのような像を井戸の底に沈めるようなことをしたとは到底思えない。建設を請け負った業者側（三井造船）の関係者が「安全祈願」のためにそのようなことをする習慣があったのではないかとのことであった。このプロジェクトにいた何人かに尋ねたが誰もこのなぞの物体について知るものはいなかつ

た。その中では若手であった現役の鈴木君に尋ねても、全く心当たりはなく、PMC完成直後には、井戸の底にそのようなものはなかったという。

謎は解けない。PMC望遠鏡フロアの階下に入れた関係者は建設工事以後では限られた人しかいない。いま少し、情報収集に努めてみよう。

The Mystery of the Automatic Photoelectric Meridian Circle (PMC)

Masao NAKAGIRI

National Astronomical Observatory, 2-21-1
Osawa, Mitaka, Tokyo 181-8588, Japan

Abstract: It is mystery under the telescope floor of an automatic photoelectric meridian circle built in 1982 by National Astronomical Observatory. There was the trace that a beast invaded the space, and lived, and the real nature was a palm civet. In addition, there was a mystery object at the bottom of a deep well of the telescope peer draining off use of neighboring sand. It was the replica of the "kiss image of Rodin" how. It is the story that an astronomical observatory history observation team explored these.